

アルベール・カミュの『異邦人』論 —— 不条理な感情の生成過程および自然との関係 ——

加藤宏幸・千葉裕平

序論

「きょう、ママが死んだ。もしかすると、きのうかもしれないが、私には分からない。養老院から電報を受け取った—『ハハウエシス。マイソウアス。ケイグ』。これでは何も分からない。おそらくきのうだったのだろう」¹⁾。アルベール・カミュ Albert Camus の小説『異邦人』 *L'Étranger* を読んだ人はだれでも、この冒頭の一文になんとも言えない不可解な感情を抱くであろう。普通の人であれば母の死の知らせを聞いたならば、ただちに驚きそして深い悲しみに襲われるのではないだろうか。それなのにはムルソー Meursault は、それがきのうなのかきょうなのかとまったく事務的なこととしか考えていない。私たちはムルソーのこの態度を初めは不可解に思う。

しかし、もし自分がその立場に立ったらどうするであろうか。本当に悲しみに打ちひしがれるであろうか。表面的には悲しい顔をするかもしれないが、頭の中ではムルソーと同じように、事務的なことと考えるのではなかろうか。そう考えたときのなんとも言えない不快感、それが不条理である。

小説『異邦人』は、カミュが自ら述べているように、この不条理をテーマに書かれた物語であり、不条理を抜きにしてこの作品を論じることにはできない。そこでわれわれは、主人公ムルソーにおける不条理な感情の生成過程、つまり何をきっかけに、いつ不条理な感情が彼に芽生えたのか、そしてその不条理に対して彼がどのような態度で接したかを考察したい。

また、地中海沿岸の町アルジェに育ったカミュにとって、《太陽》、《海》に象徴される自然の美しさを享受することは、生きることの本質であった。この物語において、この《自然》とムルソーとの関係が不条理な感情の生成過程でどのように変化して行くか、またそれは何を意味するのか、不条理な感情の生成過程とともに考察してみたい。

I. 不条理の概念

『異邦人』は不条理をテーマとして書かれた小説である。しかし、カミュがこの作品のテーマとした不条理には、一般に理解されている意味とは異なる意味が込められている。そこで、考察を進めて行くに当たって、まず初めにカミュの考える不条理とはどんなものか示しておく必要がある。

カミュは最初、初期の3作品である小説『異邦人』、戯曲『カリギュラ』 *Caligula*、評論『シ

1) CAMUS (Albert), *L'Étranger* (*Théâtre, Récits, Nouvelles*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Paris, Gallimard, [1967], p. 1127).

シュフォスの神話』 *Le Mythe de Sisyphe* を不条理3部作にしようと考えていた。不条理についての哲学的評論であり、『異邦人』の哲学的翻訳と言われている『シシュフォスの神話』には、カミュの考える不条理の概念が明確にされているので、それを不条理の基本概念とした。

一般に不条理という言葉は、「道理に反すること」、「非合理なこと」などの意味で用いられている。しかしカミュが考える不条理の概念は、これとは異なる。『シシュフォスの神話』の中でカミュは、不条理について次のように述べている。「この世界自体は合理的ではない、とこの世界について言うことができる。しかし不条理とは、この非合理的なものと明晰を求める激しい欲望の対立であり、その欲望の呼び声は人間の奥底で鳴り響いている。不条理は人間にも世界にも同程度の関わりを持っている。不条理は今のところ、両者を結ぶ唯一の絆である。憎悪だけが人間を互いにしっかりと結び付けることができるように、不条理は人間と世界を互いに密着させる。私の冒険が続けられているこの際限のない宇宙において、私のはっきりと識別できるのはこのことだけである」²⁾。つまりカミュは、不条理を《非合理的な世界と、明晰を求める人間の共存の中での、両者の対立関係》と定義づけている。

しかし私は、これはかなり厳密な意味での不条理ではないかと思う。なぜならカミュが、不条理という言葉を用いるとき、上記の不条理の定義を超えてもっと広い意味で用いているように思える。明日を望む精神を拒否する肉体の反抗 *révolte de la chair*³⁾ も、自然や風景が激しくわれわれを拒否するときに世界が見せる厚み *épaisseur* と奇怪さ *étrangeté* など不条理として挙げられているからである。この広義の不条理は、「世界の中で、人間が自分の存在に感じる違和感・断絶感」、つまり「世界と人間のあいだの断絶・ずれ」⁴⁾ と定義づけられる。これから考察を進めて行くに当たっては、広義の不条理を不条理の基本概念とする。

カミュは不条理にしたがうのではなく、それに反抗することを勧める。《不条理への反抗》とはどのような意味であろうか。「生きるとは、不条理を生かすことである。不条理を生かすとは、何よりもまず不条理を見つめることである。エウリュディケの場合とは異なって、不条理は人がそこから眼をそむけるときにのみ死ぬ。だから、首尾一貫した哲学的態度の1つは反抗である。反抗とは、人間と人間自身の闇との絶えざる対決である。反抗とは、不可能な透明性の要求である。反抗は、毎秒世界を問題にする。危険が人間に反抗を理解する絶好の機会を提供してくれると同様に、形而上的反抗は経験の間に意識を拡大する。形而上的反抗とは、人間が自己自身に対して絶えず存在していることである。それは憧れではなく、希望でもない。この反抗とは、まさしく重くのしかかる運命の確信であり、その運命に当然伴う諦めではない」⁵⁾。「不条理は、それに同意を与えない限りにおいてのみ意味がある」⁶⁾。つまりカミュは、不条理を生きななければならない人間がとるべき唯一の態度、すなわち不条理への反抗は《不条理を見つめ、かつそれに同意しないことである》と考えている。

注意しなければならないのは、不条理は1つの事実であるとともに、ある人々のこの事実

2) CAMUS (Albert), *Le Mythe de Sisyphe (Essais)*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Paris, Gallimard, [1977], p. 113.

3) *Ibid.*, p. 107. カミュは注釈において、これは本来の意味の不条理ではなく、不条理を含み得る感情の例である、と述べている。

4) この定義づけは、ジャン＝ポール・サルトル著 (佐藤朔ほか訳) 『シチュアション I』 (人文書院, 1965年, 91ページ) を参考にした。

5) CAMUS, *Le Mythe de Sisyphe*, p. 138.

6) *Ibid.*, p. 121.

対する明確な意識をもいう点である。《不条理な人間》とは、その人間が不条理なのではなく、不条理を明確に意識し、それに反抗し続ける人間のことである。

II. 異邦人としてのムルソー

カミュの小説『異邦人』において、《異邦人》なのは明らかに主人公ムルソーである。彼はアルジェに住む平凡なサラリーマンであるが、非道徳で何事にも無関心な彼は、明らかに他の人々とは異なっている。この章では、彼と、彼と対照的な検事らを比較することによって、彼がどのように《異邦人》であり、またそれは何を意味するのかを考察してみたい。

1. 社会としての判事

ムルソーの異邦人性を明らかにするために、まず最初に彼と対峙的な関係にある判事らについて述べたい。『異邦人』において固有名詞ではなく、社会的役職名で登場する人々（門番、養老院の院長、予審判事、検事、裁判官、司祭等）は、社会で一般に付与された典型的特徴を持った人物として描かれる。彼らは世界は合理的であると確信しているのも、ものごと全てを体系的に理解しようとする。

ある事実は他の事実と関連して、初めて意味を持つ。全ての事実は因果関係を持ち、必然的に関連する。それ故彼らは、自ら合理的と確信している世界を守るために、その《理由》を尋ねる。門番は通夜の席で、母の死に顔を見ようとしなないムルソーに、「どうして見たくないのですか」と尋ねる⁷⁾。予審判事は、「あなたの振る舞いには、私には分からない点があります。それらが理解できるよう私を助けてくれると確信しています⁸⁾」と言って、ムルソーに事件の体系的説明を求め、銃を間をおいて撃った点にくると、「なぜあなたは、1発目と2発目のあいだに間をおいたのですか」、「なぜ、なぜあなたは、地面に横たわっている体に発砲したのですか」、「なぜです、それを私に言ってもらわなければなりません。なぜですか⁹⁾」と「なぜ」を連呼する。また裁判で検事は、「それなら、なぜこの男は武器を持っていたのですか、なぜちょうどその場所に戻ってきたのですか¹⁰⁾」と尋ね、司祭は、「なぜ私の面会を拒否するのですか¹¹⁾」と尋ねる。

すべての事実が必然的に起こると考えている彼らは、偶然を許容しない。最後の証人として、レイモン Raymond が証言台に立つ。「しかしながら裁判長は、被害者は私を憎む理由がないのではないかと尋ねた。レイモンは、私が浜辺にいたのは偶然の結果だ、と言った。すると検事は彼に、悲劇の原因となった手紙がどのようにして私によって書かれたのか、と尋ねた。レイモンは、それも偶然だ、と答えた。検事は、この事件においては、偶然がすでに良心の上になくさんの害を及ぼしている、と反論した。検事は、レイモンが情婦に平手打ちを食らわせたとき、私が割って入らなかったことも偶然か、私が警察で証人となったのも偶然か、またこの証言の際の私の供述が非常に好意的であったことが明らかになったことも偶然なのか、と問い詰

7) CAMUS, *L'Étranger*, p. 1129.

8) *Ibid.*, p. 1173.

9) *Ibid.*, p. 1174.

10) *Ibid.*, p. 1188.

11) *Ibid.*, p. 1207.

めた」¹²⁾。偶然は彼らの合理性と相容れない。

そして彼らは、人間を典型的に把握しようとする。門番は部屋から出て行くアラビア人の看護婦に、「あの女には腫瘍があるんです」¹³⁾と、まるで1つの病名の下に人間を分類するかのようになり、軽蔑の言葉を発する。またムルソーが口数が少ないのは、「言うべきことが大してないから黙っているのに」、予審判事は彼を、「寡黙で閉鎖的性格」と、心理学的に分類する¹⁴⁾。そして次席検事は陪審員に向かって、レイモンを売春婦のひもであると、言い、それだけで彼をだらしのない人間と極め付け、ムルソーに「この男はおまえの友人だったのか」と尋ね、「そうです」と答えたムルソーを、陪審員にレイモンと同じ低劣な人間であるかのように印象づけた後で、ムルソーが起こした事件を「最低の卑劣な事件」と断言する¹⁵⁾。

彼らは、人間も世界と同じように、合理的で体系的把握が可能であると考えている。彼らは人間を対象化し一般化することによって、人間の本質を捉える。彼らにとって人間の本質とは、人は自分の母の葬式で涙を流すものであり、その翌日は喪に服するものなのである。その本質を持たないムルソーは、彼らにとっては「人間らしいものはなにもない」¹⁶⁾のものであり、「鬼畜のごとき」¹⁷⁾のものであるが故に、彼らはムルソーに死刑を宣告する。

2. 異邦人としてのムルソー

ムルソーは事実と事実の間の関連を必要としない。彼は予審のとき、「私の肉体的欲求がしばしば感情の邪魔をした」¹⁸⁾と述べている。彼は今感じる欲求にしたがって行動する。次の行動は、それをしたいかしたくないかによって決定される。「走ることへの非常に激しい衝動」¹⁹⁾が起これば、彼は走っているトラックの荷台に飛び乗りさえる。葬儀の翌日に海水浴に行ったのも、マリー Marie と肉体関係を持ったのもそうしたからただけである。マリーに「私を愛してる」と聞かれ、ムルソーは「それには何の意味もないが、おそらく愛してない」²⁰⁾と答える。世間で言う《愛》とは、切れ切れの感情の抽象的統一でしかない。ムルソーにとっては、そのような愛は何の意味もない。

ムルソーにとって、1つの事実はそれ自体で充実していて説明を必要としない。裁判の証人喚問でセレスト Céleste が、ムルソーの犯行について、あれは不運だったと繰り返すことしかできないのも、それが説明できないことだからである。ムルソーの犯行は、偶然が重なり合って、「太陽のせい」²¹⁾引き金を引いたとしか言いようがない。

ムルソーは人間を典型的に把握しようとはしない。裁判で検事がマリーを「彼の情婦」²²⁾と呼んだので、一瞬だれのことか分からない。彼にとっては、マリーはマリーであるからである。ムルソーはマリーとの結婚に全く興味を示さない。結婚は社会的身分の変化でしかなく、何の意味もないからである。レイモンが女を食いものにし、この界限であまり好かれていないと聞

12) *Ibid.*, p. 1193.

13) *Ibid.*, p. 1129.

14) *Ibid.*, p. 1173.

15) *Ibid.*, p. 1193.

16) *Ibid.*, p. 1197.

17) *Ibid.*, p. 1198.

18) *Ibid.*, p. 1172.

19) *Ibid.*, p. 1143.

20) *Ibid.*, p. 1156.

21) *Ibid.*, p. 1198.

22) *Ibid.*, p. 1196.

いても、話が面白いので、ムルソーはレイモンと親しく付き合う。彼は人間を類型的に把握しようとする世間を気にしない。

ムルソーは世界の非合理性に無意識ながらも気が付いている。それ故、彼は明晰さを求めようとはしない。彼の口癖である「それはどうでもいいことだ」は、明晰さを求めることの放棄である。世界の非合理性、すべての事象の偶然性を無自覚ながらも認識しているので、ムルソーは事実の体系的把握や人間の類型的把握をしようとししない。現在を生きる彼にとって、1つの事象はその存在のみで充実している。

III. 不条理以前

ここまで不条理の概念と異邦人としてのムルソーについて述べてきたが、次に本題であるムルソーと不条理との関係、ムルソーと自然との関係について順次考察して行きたい。まずこの章では、小説の第1部、つまりムルソーの犯行以前における彼と自然との調和、およびその中に見られる不条理の予兆について論じたい。

1. 自然の享受

ムルソーにとって、生きる喜びは自然の美しさの中に見出だされる。彼がとりわけ生きる喜びを感じるのは、太陽の光の下においてである。太陽の光の下での自然の享受は、カミュの生の本質である。彼の死後発表されたメモの1936年1月の部分に、次のような文が見られる。「そよ風が吹く。影がカーテンの上をゆれ動く。一片の雲が掛かる。そしてまた太陽が顔をのぞかせる。すると、かげっていた花瓶のモミザの黄色が燃えるように輝く。それでもうじゅうぶんなのだ。うまれでたこのたった一条の光のきらめき。それだけで僕は、漠とした目眩く喜びにひたされてしまう」²³⁾

ムルソーは海が好きで、よく海辺に行く。砂浜で彼は、太陽の光を十分に浴び満足する。街での彼の日々の生活は、単調で灰色である。しかし週末に、彼が太陽の光の下で過ごす砂浜では、画面が急にカラーになったかのように情景が鮮やかに輝き始める。彼はそこで、太陽、空、マリー、水浴などが与えてくれる肉体的歓喜に浸る。第1部には、ムルソーが海水浴に行く場面が3回もある。最初は、母の葬儀の翌日である。この時ムルソーは、水中で以前から憎からず思っていたマリーに再会し、その夜肉体関係を持ち、それ以後愛し合うようになる。2度目はレイモンが彼の情婦に暴行を加える前日の土曜日、このときもマリーと一緒に行き、肉体関係を持つ。3度目は第1部の最後、ムルソーが殺人を犯した日、マリーとレイモンと3人でレイモンの友人であるマソン Masson の別荘に行ったときである。このとき浜辺に降りたムルソーは、「太陽が私にもたらす幸せを夢中になって感じ取っていた」²⁴⁾。それは、それまで気になっていたマソンの話し方の癖を忘れさせてしまう程である。またこのときも、ムルソーは、水の中で足を絡めてくるマリーに欲望を感じる。

海水浴においてムルソーは、いつもマリーに肉欲を感じる。ムルソーにとっては太陽とマリーは同価値のものであり、小麦色に焼けたマリーの体は太陽の象徴なのである。カミュにとっては、太陽の光は肉欲のイメージである。彼は初期のエッセー『結婚』*Noces* でつぎのように述

23) アルベール・カミュ著 (高畑正明訳) 『太陽の讃歌・カミュの手帖1』, 新潮社, 1962年 15ページ。

24) CAMUS, *L'Étranger*, p. 1162.

べている。「女の体を抱くこと、それはまた、空から海に降ってくるあの不思議な悦びをわが身にひきとめることである」²⁵⁾

太陽の光と自然の美の享受、マリーが起こさせる肉欲は、ムルソーに自然との一体感を感じさせる。ムルソーはマリーと泳いでいるとき、「われわれは、われわれの動作も満足感も一致しているのを感じていた」²⁶⁾。第1部において、太陽の光とマリーの魅力の享受に生きる喜びを見出だすムルソーは、完全に自然と調和していると言えよう。

2. 不条理の予兆

しかしながら第1部において、ムルソーと自然との断絶を予期させる、自然との不調和感、太陽の熱気による眩惑が2度起こる。最初は、母の埋葬のために教会に向かっているときである。この日は、「太陽は光をあふれんばかりに注ぎ、風景を震わせ、風景を非人間的にし、衰弱させていた」²⁷⁾。葬列が出発すると、太陽は驚くような速さで昇り、母の許婚と言われていたペレ老人を失神させる程の熱気を放つ。ムルソーもまた太陽の熱気にめまいを起こしかける。「わたしの周囲には、相変わらず日の光にあふれた輝く同じ野原が広がっていた。空の輝きは耐えがたかった。突然われわれは、最近修復された道路の一部を通った。太陽がタールを破裂させてしまっていた。足がそこにはまり込み、そのきらきら光る肉を広げた。馬車の上の、煮沸処理をした革でできた御者の帽子は、この黒い泥の中でこねられたように見えた。私は青と白の空、単調なこれらの色彩の間において、少し頭が変になっていた。広げられたタールのねばっこい黒、着物のくすんだ黒、馬車の漆塗りの黒。太陽、馬車の革と馬糞の臭い、ニスの臭い、香の臭い、不眠の夜の疲労、これらすべてが私の視力と思考を乱していた」²⁸⁾

しかしこのときの自然との不調和感は、翌日単調で平凡な生活に戻ると消え去る。2度目にムルソーが自然との調和を乱すのは、やはり太陽の光が雨のように降り注ぐ浜辺においてである。ムルソーはレイモンとマリーと一緒に、レイモンの友人のマソンの別荘に遊びに来る。マリーを別荘に残し、男3人は浜辺に行く。太陽の光が垂直に降り注ぎ、海がきらきら光っている。そこで出会ったアラビア人たちと喧嘩になり、レイモンが切りつけられる。別荘に戻るや否や、レイモンは再び浜辺に向かう。ムルソーもついて行く。浜辺は「さっきと同じように、破裂して赤くなっていて」、ムルソーは「太陽の光を浴びて額がふくれるのを感じ」、「全力を尽くして、太陽と、太陽が浴びせる不透明なこの陶酔に打ち勝とうとした」²⁹⁾。そこで再び、アラビア人の一団と出会う。「太陽の光による火傷は私の頬にも及び、眉毛に汗のしずくがたまるのを感じた。それはママを埋葬した日と同じ太陽であり、そのときのように、特に額に痛みを感じ、すべての血管が皮膚の下で一緒に脈打っていた。この火傷にもう耐えることができなくなり、私は1歩前に踏み出した」³⁰⁾

太陽による眩惑によって、ムルソーはアラビア人を殺害してしまう。彼は自然との調和を乱したのを実感する。「引き金が押され、わたしは銃尾のなめらかな腹に触った。乾いた、耳を聳る音とともに、すべてが始まったのはこのときである。私は汗と太陽を振り払った。私は、昼間の均衡と私がそこに幸福を感じていたその浜辺の特別な沈黙を破壊してしまったことを悟

25) アルベール・カミュ著 (高畑正明ほか訳) 『カミュ全集1』, 新潮社, 1972年, 201ページ。

26) CAMUS, *L'Étranger*, p. 1162.

27) *Ibid.*, p. 1135.

28) *Ibid.*, p. 1136.

29) *Ibid.*, p. 1167.

30) *Ibid.*, p. 1168.

った」³¹⁾。これが、彼が不条理に目覚める切っ掛けとなる。彼は逮捕され、もう日常の習慣に戻れなくなる。

IV. 不条理の認識

小説の第2部でムルソーがどのようにして不条理な感情に目覚めて行くか、それと同時に今まで彼が親しんできた自然との関係がどのように変わって行くかを考察したい。

1. 不条理な感情の目覚め

裁判において検事により言葉と理論で再構築されるムルソーの犯行と、実際の犯行には大きなずれがある。実際の事件は偶然が引き起こしたものであるにもかかわらず、検事は事件はすべての事象が必然的に起こった結果によるものと考えからである。検事はすべての事象を関連づけて、ムルソーの意図的犯行を立証しようとする。検事は、ムルソーが母の年齢を知らなかったこと、母の葬儀のとき涙を流さなかったこと、葬儀の翌日に喜劇映画を見、マリーと肉体関係を持ったことなど、犯行に直接関係のないことまで、ムルソーの犯行に重要な関係を持っていると考える。そして検事は、次のように結論づける。「母の死の翌日、もっとも恥ずべき放蕩に耽ったその男が、くだらない理由から、言語道断な男女問題にけりをつけようとして人を殺したのです」³²⁾

しかし実際は、ムルソーの殺人は偶然の重なりから「太陽のせい」で行われた。検事が再構成したこの犯行事実、実際とはあまりにも掛け離れている。それ故ムルソーは、検事と弁護士のやりとりが自分に関することであると認識できない。また裁判上の慣習から、弁護士はムルソーのことを述べる時、「ムルソーは」とか「彼は」と言わずに「私は」と言う。これらのことから、ムルソーは自分抜きで裁判が進められて行くように感じる。

ムルソーは世界の非合理性を感じる。検事らが事件を無理矢理体系づけようとするので、彼は非合理性をより強く感じる。非合理的な世界をだれも体系づけることはできない。彼は非合理的な世界の中で人間が明晰を求めようとするのは愚かであることを知り、同時に自分という人間存在の不自然さを認識する。彼は世界から遠く離れてしまう。世界と自分の間の断絶から、不条理な感情が芽生える。

2. 自然との疎遠化

第1部においてムルソーと調和していた自然は、裁判が進みムルソーに不条理な感情が芽生えるにつれ、彼にとって遠い無縁なものになって行く。彼がそれを最初に意識したのは、マリーと面会したときである。面会室に入ったとき、ムルソーは窓ガラスから差し込むあざあざしい光にめまいを感じる。彼は面会に来たマリーを見て抱き締めたいと思うが、いつのまにか目もとの小皺と歯のきらめきしか見えなくなり、マリーとの会話はお座りになる。最後には周りの騒音に気分が悪くなったことと相俟って、早く部屋を出たいという気持ちにさえなる。前に述べたように、マリーはムルソーにとって太陽の象徴である。したがって、これはムルソーと自然との疎遠化の兆しである。

31) *Ibid.*, p. 1168.

32) *Ibid.*, p. 1193.

しかしながら彼は、監獄にいる最初のうちは、自然を懐かしみ回想する。「浜辺に出て、海へ降りて行きたいという欲望に襲われた。私の足もとの植物に寄せてくる最初の波の音、体を水に浸す感触、水の中での解放感を思い出していた」³³⁾。しかしその後は、ムルソーは囚人の考え方しかできなくなる。彼は毎日追憶に耽り時間をつぶす。彼はこの時すでに、彼が太陽の光を享受していた、自分と調和していた世界を、自分とは遠い無縁の世界と考え始めていた。物語の第1部においては、太陽はムルソーにとっては生きる喜びであったが、第2部においては、太陽は彼にとっては不快なものとなる。「日除けは下りていたが、太陽の光がところどころから侵入し、空気はすでに息詰まるようであった」³⁴⁾。「暑さが増して行った。部屋の中で傍聴人が新聞であおぐのが見え、皺くちゃになった紙の立てる、小さな音が絶え間なく続いていた」³⁵⁾。真昼の太陽は、ムルソーにとってはもう不快なものではない。

裁判が終わり、車に乗るまでの一瞬、ムルソーは夏の夕べの香りとし色と物音を再発見した。「それらすべては、監獄に入る以前に私がよく知っていたものである。そうだ、ずっと前に、私が満足したのはこのひとときであった。そのとき私を待っていたのは、いつも夢も見ない軽やかな眠りであった。しかしながら、もう何かが変わっていた。明日への期待とともに、私が再発見したのは自分の独房であるから。夏の空に付けられた親しい道が、監獄にも無邪気な眠りにも通じるかのように」³⁶⁾。「夏の空に付けられた親しい道」とは太陽のことであり、夕方という時刻は昼と夜、光と闇の分岐点である。今までムルソーは、太陽のもたらす光、つまり自然の正の面のみを意識しそれを享受してきた。しかし彼は、夕暮の空を見上げたこのとき、太陽がもたらす影、つまり自然の負の面に気がついた。太陽は光を与えてくれるが、同時に影もつくる。自然の持つ正と負の二面性を、ムルソーはこのとき意識し始めた。

裁判が進行するにつれて、ムルソーは自然から次第に遠ざかって行く。弁護士が話し続けているとき、アイスクリーム売りのラッパの音がムルソーまで届き、彼は夏の匂い、愛していた街、夕べの空、マリーの笑い声とドレス、今や彼の手の届かないものを思い出す。しかしこのとき彼は、「裁判が早く終わり、独房に帰って眠りたいと願った」³⁷⁾。彼は、自分が親しんだ生活や自然がもう自分とは無縁であると思う。

裁判が進行するにつれて、ムルソーの中に芽生えた不条理の感情が次第に強まり、自分と世界の間で断絶を感じる。この世界との断絶を切っ掛けに、自分と親しみ調和していた太陽に象徴される自然は、彼から離れて行く。

V. 不条理への反抗

ムルソーにとって最大の不条理である死という不条理の出現と、それに対決するムルソーについてまず考察したい。つづいてその不条理に反抗することによって、一度は疎遠になったムルソーと自然との関係が再接近するが、どのような理由からそうなるのか、それがどのような意味を持つのかについて考察したい。

33) *Ibid.*, p. 1180.

34) *Ibid.*, p. 1184.

35) *Ibid.*, p. 1187.

36) *Ibid.*, p. 1194.

37) *Ibid.*, p. 1199.

1. 死という不条理

死刑の判決を受けたムルソーは不条理を強く意識する。それは、死という不条理である。彼は最初、死刑の確実性を受け入れることができない。「なぜなら要するに、その確実性に基礎を与えた判決と、判決が言い渡されてからの、その冷酷な実施との間には、滑稽な不均衡があったからである。判決が17時ではなく20時に読み上げられたという事実、判決が全く別のものになり得たかもしれないという事実、判決の内容が下着を取り替える人たちによって決められたという事実、それがフランス国民（またはドイツ国民、または中国国民）といった不明確な概念の名においてなされたという事実、このようなすべてが、このような決定から多くの真面目さを取り去ってしまうように思えた」³⁸⁾。世界が偶然の重なりから成り立っている以上、この死刑判決も偶然の重なりの結果もたらされたものである。しかし、死刑判決は一度宣告されれば、その実施は絶対的であり、受刑者の死は確定的である。この不均衡をムルソーは受け入れることができない。

ムルソーは処刑を逃れるチャンスについて考えてみた。受刑者に処刑を免れるチャンスを与えるような法律案も作ってみた。「ものごとをよく考え、冷静に検討してみたとき、ギロチンによる処刑において不備な点は、チャンスが全くないということを私は確認することができた。要するに完全に、受刑者の死は確定してしまっている。それは処理済みの事柄であり、はっきりと決められた組み合わせであり、了解済の、全く取り消せない協定である。何かの拍子であることが失敗しても、やり直すしかない。したがって、困ったことであるが、受刑者は機械が順調に作動することを望むしかない」³⁹⁾

ムルソーにとって世界は非合理であるので、すべての事象は偶然の産物であり、生きることは偶然の積み重ねである。それ故、死刑の判決も偶然である。しかし、偶然の産物である死刑の執行は、必然的であり、逃れることができない。必然的に死を受け入れなければならないムルソーは、偶然の積み重ねからなる世界と自分の存在の間に断絶を感じる。このときムルソーは、世界との完全な断絶感、つまり不条理な感情を覚える。

「要するにこれほど明らかなことは何もない。今であろうと、20年後であろうと、死ぬのは変わることはなくこの私である」⁴⁰⁾。問題は目前に迫った死ではなく、すべての人間が死ぬべき運命にあるという事実そのものである。人間は偶然的生を生きるが、死は必然的に誰にでも訪れる。それは全ての人間に課せられた不条理である。

2. 不条理への反抗——希望・宗教の否定

独房の中で《処刑》つまり《不条理》を前にしたムルソーにとって、選択可能な道は、《希望》、《反抗》、《宗教》のうちの1つだけである。判決を宣告された後にムルソーの頭を絶えず占めていたのは、《夜明け》と《上訴》である。夜明けは、死刑執行人の来る時刻である。彼は真夜中を過ぎると、耳を澄まして彼らを待ち構える。《夜明け》とは死刑の執行、つまり死のことである。一方昼間は、彼は上訴のことを考える。《上訴》とはつまり生きる希望のことである。

「死ぬのであれば、どうしてとかいつとかはどうでもいい。それは明白である」⁴¹⁾。このように考えて、ムルソーは希望を棄て、上訴の却下を承認する。希望を抱くことは、不条理から眼

38) *Ibid.*, p. 1203.

39) *Ibid.*, p. 1204.

40) *Ibid.*, p. 1206.

41) *Ibid.*, p. 1206.

をそらすことである。希望とは、不条理を排斥し、不条理を意識しないようにすることである。希望を抱かないことは、絶望することではない。重要なことは、不条理を見つめ不条理に反抗し続けることである。反抗とは、不条理の存在を認め不条理に同意しないことである。

宗教もまた、希望と同じように不条理から眼をそらすことである。ムルソーは面会に来た司祭に暴言を吐き追い返す。「生そのものために生きるのではなく、生を超え、生を昇華し、生に1つの意義を与え、そして生を裏切る何らかの偉大な観念のために生きる」⁴²⁾よう教える宗教は、世界の非合理についての意識を消滅させ、不条理をうやむやにさせるものであり、ムルソーにとっては欺瞞でしかない。ムルソーは司祭におちまける。「あなたは確信に満ちた様子ですね。しかしながら、あなたの確信のどれも女の髪の毛の1本の値打ちもない。あなたは死人のように生きているから、生きていることさえ確信できない。私はたとえば、両手はからっぽのようだ。しかし私は、自分に、すべてに確信を持っているし、あなたより強く自分の人生と来ようとしている死に確信を持っている」⁴³⁾。現在時を生きるムルソーにとっては生きることそれ自体が目的なのであり、死後の幸福のために生きるようにと教える司祭は、ムルソーにとっては生きているとは言えない。

死が恐ろしいのは死を待つ時間である。『太陽の讃歌』の1938年12月の部分で、カミュは次のように述べている。「病院で、肺病患者に、医者が、あと5日しかもたないと告げてしまった。かれはその先を越し、剃刀で喉をかき切ってしまった。明らかにかれはその5日間が待てなかったのだ」⁴⁴⁾。人は普段《死を意識せずに》生きている。だから、自分が死ぬ日をはっきりと提示されると、恐怖に耐えられなくなる。それに対してムルソーは、「死ぬのであれば、どうしてとかいつとかはどうでもいい」⁴⁵⁾という考えに到達している。彼は自分の死をはっきりと意識しているが、死の恐怖を克服してしまっている。司祭の質問に、彼は次のように答える。「『しかしあなたは、きょう死ななくとも、やがて死ぬことになる。そのときには同じ問題が課せられることになる。この恐ろしい試練にどのように立ち向かうことができるでしょうか。今私が立ち向かっているとまったく同じように立ち向かうでしょうか』と答えた」⁴⁶⁾ムルソーはすでに死に立ち向かっている。

ムルソーは不条理な人間になった。不条理な人間とは、不条理を見つめ、不条理に反抗し続ける人間のことである。独房に横たわるムルソーにできる唯一の反抗は、死すなわち不条理を見つめ、死をはっきりと運命づけられた、残り少ない生を生き続けることである。ムルソーは司祭に言う。「私は、自分に、すべてに、確信を持っているし、あなたより強く、自分の人生と来ようとしている死に確信を持っている」⁴⁷⁾。ムルソーは、死をはっきりと意識し生きている。

3. 自然への回帰

不条理な感情が芽生えるとともにムルソーから遠ざかっていた自然は、処刑を前にし、ムルソーが不条理な人間になった今、再び彼と一致する。しかし、注目しなければならないことがある。それは、ムルソーが再び自然と一致したのは、第1部で彼が親しんだ太陽の下においてではなく、夜の闇においてであるという点である。

42) Camus, *Le Mythe de Sisyphe*, pp. 102-103.

43) Camus, *L'Étranger*, p. 1210.

44) アルベール・カミュ著 (高畑正明訳) 『太陽の讃歌・カミュの手帖1』, 24ページ。

45) Camus, *L'Étranger*, p. 1206.

46) *Ibid.*, p. 1208.

47) *Ibid.*, p. 1210.

ムルソーにとってマリーは太陽の象徴であったが、「マリーの思い出はどうでもよくなった」⁴⁸⁾。司祭の面会の後、ムルソーは独房で眠りに落ちる。顔に射す星の光で目を覚ましたとき、彼は再び自然と一体になるのを感じる。「田園のざわめきが私のもとまで上がって来た。夜と大地と塩の匂いがこめかみをさわやかにした。この眠れる夏の素晴らしい安らぎが、潮のように私のなかに入り込んで来た」⁴⁹⁾

VI. 結論

われわれは日常生活において、不条理を意識することはほとんどない。それは、カミュが『シシュポスの神話』の中で述べているように、主として日々の習慣のせいである。習慣はわれわれを不条理から盲目にさせる。しかしあるとき、日々の生活において不条理を突然意識する。「突然舞台装置が崩壊することがある。起床、電車、会社や工場での4時間、食事、電車、4時間の仕事、睡眠、同じリズムで過ぎて行く月火水木金土——大部分の時間、このような道をたやすくたどっている。ところがある日、《なぜ》という問が生じ、驚きの色に染められたこの倦怠の中ですべてが始まる」⁵⁰⁾

しかし、『異邦人』におけるムルソーの不条理への目覚めは、これとは少し異なる。彼が日々の生活において、不条理に気が付かないのは、習慣のせいばかりではない。確かにムルソーは日々の習慣の中に生き、「人はついにはどんなことにも慣れてしまう」⁵¹⁾と考えている。しかしムルソーが不条理を意識せずに生きてこられたのは、むしろ彼が世界の非合理性を無意識に認識しているからである。ムルソーは現在時の感情や欲求にしたがって生きる人間である。それ故、彼はものごとを体系的に把握しようとはせず、「それはどうでもいいことだ」の一言で、明晰を求めることを放棄する。人が明晰を求めようとすれば、ついには世界の非合理性を前に、人間と世界の断絶、つまり不条理に直面しなければならない。しかしムルソーのように、世界の非合理性を無意識に認識し、明晰を求めようとしなければ不条理に直面することはない。ムルソーは不条理に目覚めにくい人間であると言える。

明晰を求めることを放棄したムルソーであるが、自分自身の裁判においては明晰を求めようとする人たちを知り、その愚かさを認識する。それは、マリーの供述の場面にもっともよく示されている。検事の質問に対してマリーはその日の行動を1つ1つ述べたが、それらは彼女の意図に反してムルソーにとって不利に働く。ムルソーはこの裁判で、明晰を求めようとする人間の行為の愚かしさを知り、また事実とあまりにも掛け離れている検事の解釈に、裁判が自分の裁判であるとは思えず、世界と自分との断絶を意識する。つまり不条理な感情の出現である。

しかしこれは、ムルソーにとっては本質的な不条理ではない。本質的な不条理は、むしろ裁判の後にムルソーが直面する、死についての不条理である。偶然的生を生きるムルソーにとっては、判決もまた偶然の産物でしかない。しかしその判決がもたらす死は、絶対的で逃れることができない。偶然の積み重ねからなる世界と、必然的な死という運命を背負わされた人間、この両者の間の断絶にムルソーは本質的な不条理を感じる。

48) *Ibid.*, p. 1207.

49) *Ibid.*, p. 1212.

50) Camus, *Le Mythe de Sisyphe*, pp. 106-107.

51) Camus, *L'Étranger*, p. 1180.

ムルソーは不条理に反抗する。不条理をしっかりと見つめ、それに同意しない。独房の中で彼は、不条理である死を見つめ、死を拒否する。つまり、《死》を意識しつつ《生きる》。この物語におけるムルソーと自然との関係は、調和（太陽）→疎遠→調和（夜）という流れで進行する。一方彼と不条理の関係は、不条理以前（不条理を意識していないこと）→不条理の認識→不条理への反抗という流れで進行する。この2つの流れは、明らかにある意図をもって相対的に描かれている。

太陽の光は不条理以前の象徴として、また夜の闇は不条理の象徴として描かれている。昼と夜とは表裏一体であり、昼の陽光は夜なしには存在し得ない。しかし、人々は昼の陽光のみに生を感じ、まるで夜を知らぬかのように生きている。そして人々は不条理を意識せず、まるで不条理が存在しないかのように生きている。

第1部、つまり不条理を意識する以前までは、ムルソーにとっては太陽の光を享受することこそが生きることであり、闇に生を意識することはなかった。いわば彼は、自然の正の面のみを見ていたと言える。このときムルソーは、自らの存在の異邦性を疑うことはなく、自然と調和していた。しかし裁判が始まると、ムルソーが今まで親しんできた太陽は、不快なものとなり疎遠になる。それは、裁判において自分と世界の間断絶を意識し、不条理な感情が芽生えたからである。

処刑を前にして不条理な人間となったムルソーは、死が彼を捕らえていると同じくらいしっかりと死を捕らえている。彼は毎日死に直面して生きているが、それは自殺のような消極的な態度ではない。彼は不条理つまり死を見つめながらも生きる喜びを感じる。彼は不条理に反抗しながら、それと共存する。彼は世界における自らの在り方を発見したのである。「世界がこんなにも自分に類似し、こんなにも親しく感じられ、私は自分が幸福であったし、今でも幸福であると感じた」⁵²⁾

この論文は、1955年1月に、千葉裕平氏（平成3年度入学、岩手大学人文社会科学部、地域文化コース、78番）によって提出された特別研究（卒業論文）を元にして書かれた。非常に優れた論文であるので、公表しないでおくのは惜しいと思い、論文の指導教官であった加藤が一部書き直し、一部書き加え、全体を整理してここに発表した。

52) *Ibid.*, p. 1211.